

## I. B. レーニンのロシアにおける

### 出稼ぎ農民層把握の論理

#### — 資本主義の発展と農民層の共同体からの自立化過程 —

北海道大学 浅野慎一

農民出稼ぎは、自営農民と賃労働者の間を結ぶ「階級間移動」であると同時に、農村と都市との間の「地域間移動」でもある。かかる特質は、農民出稼ぎに独特の矛盾を核印せざるを得ない。しかし同時にそれは、出稼ぎ農民諸個人が、自らの生産・労働・生活過程を通して「都市と農村の対立」を体験し、賃労働者と自営農民、都市と農村の相異なる位相の文化を交流・伝達する中で、自己を内在的に変化させつつあることを意味している。農民出稼ぎの社会的意義を理解するためには、こうした基本的視角、すなわち、出稼ぎに行かざるを得ない農業・農村生活状況下での諸体験を土台にして。

また出稼ぎ先の賃労働や都市生活での諸体験を内在化する中で、農民層がいかなる力量を身につけてあるのか、そしてかかる農民層の主体的な変化が、農業生産や生活を維持・発展させうる協働形態の発展、すなわち農村社会の変動・変革の中に、客観的にいかに定着しているのかをえる視角が、不可欠になるのである。

ところが、従来の日本の出稼ぎ研究においては、こうした基本視角はきわめて薄弱であった。日本の出稼ぎ研究は、明治期以来の農富な蓄積を有しているが、その中で、出稼ぎ先での賃労働・都市生活の実態と地元での農業生産・農村生活のそれを統一的に把握し、そこでの諸体験を内在化する中で出稼農民自身がいかなる変化をと

げつつあるのかを展望する理論枠を持ちえた研究はほとんど皆無に近いといってよい。とりわけ戦後、出稼ぎの需給メカニズムに関心が集中する中で、多くの場合、出稼ぎ農民は「相対的過剰人口」・流动化された農業労働「力」としてのみ把握され、出稼ぎを通して農民層が主体的に土地所有・農業生産を維持してきたことの意味や、出稼ぎ先での諸体験をふまえた出稼ぎ農民の変化が農村社会の変動・変革にもたらす影響などは、等閑視されてきたのである。そこで報告者は、これまで、こうした基本的視角から、戦後日本の出稼ぎ農民を対象として実証研究を積み重ね、その一端は「村落社会研究」第二〇集等でも発表してきた。

ところで、筆者が主題としている資本主義的生産様式の下での農民出稼ぎは、戦後日本にのみ見られる社会現象ではない。むしろ資本主義的生産様式の世界的な形成・発展の各段階毎に、農民層の出稼ぎ労働はつねに構造的に創り出され、重要な役割を果たしてきた。現に、産業資本主義段階におけるイギリス資本主義の確立は、アイルランドをはじめとする諸外国からの農民層の出稼ぎ・移民流入を抜きには考えられなかつたし、帝国主義段階におけるロシア、ドイツ等の後進資本主義諸国におけるイギリス資本主義の確立は、アイルランドをはじめとする諸外国からの農民層の出稼ぎ・移民流入をの発展も、ロシア、ドイツ国内およびボーランドをはじめとする諸外国からの農民層の出稼ぎ・移民流入によつて根底から支えられていた。さらに今日、アメリカや西ヨーロッパ等に「雇用を目的として母国以外の国に移動」する外国人労働者は約二〇〇〇万人に及び、この中に多数の出稼ぎ農民層が内包されていることも周知の事実である。いわば農民層の出稼ぎは、世界史的にも資本主義的生産様式の発展に沿つて、しかも世界資本主義経済の中で各国の占める位置

に違いに基づき、多様な形で創り出され、活用されてきた。その意味で、外国人移民・出稼ぎ労働者の国内への新たな参入を排除し、「純粹培養」的に流動化された国内農村人口としての戦後日本の農民出稼ぎも、資本主義的生産様式の発展に不可欠な「人口法則の一環」としての普遍性と、特殊戦後日本的な歴史的・地域的規定性を刻印されたものとして、とらえ直される必要がある。そして、これまで筆者が主に考察してきた出稼ぎ農民層の主体的な変化の内実も、まさにこうした世界史的な出稼ぎ労働の発展段階の中に位置づけられてこそ、より明確にとらえることができると思われる。

しかもさらに注目すべきことは、報告者がこれまで戦後日本の出稼ぎ農民を対象に構想してきた視角、すなわち出稼ぎ化の下での諸個人の諸能力の発展を、その客観的蓄積としての社会変動・変革と連鎖させて把握する社会学的な基本視角が、世界的な出稼ぎ・移民研究においては、むしろ資本主義的な出稼ぎ・移民の発生とともに明確に設定され、以後、資本主義の発展とともになう出稼ぎ・移民労働の質的な変化に沿って一層深められてきたという事実である。産業資本主義段階のイギリスにおけるアイルランド農民の出稼ぎ・移民を研究したマスクスとエンゲルスの論稿や、帝国主義段階のロシア・ドイツなどにおいて国内や東ヨーロッパ諸国から移動してきた農民出稼び・移民の実態やその社会的意義について考察したレーニン、カウツキー、ウェーバー、トーマス、ズナニエツキ等々の古典的な著作は、それぞれの歴史的・地域的特質を核印しつつも、こうした基本的視角の深化を端的に示す諸成果であるといえよう。これらの中で、マルクス・エンゲルスのアイルランド人出稼ぎ問題については、すでに報告者は、北海道大学教育学部紀要第四八号等で検

討を加えた。

そこで本報告では、出稼ぎ研究におけるこうした社会学的な基本視角の歴史的発展過程を総括し、この視角を社会科学的に一層鋭利なものにするための理論的作業の一環として、帝国主義段階における後進資本主義国ロシアの農民出稼ぎに関するI.B.レーニンの分析論理の深化を、とりわけロシアにおける資本主義の発展と共同体の特質との関連に留意しつつ、検討していきたい。